

ミケランジェロの素描《ヘラクレスとアンタイオス》

— 視点を手掛かりとした群像表現の考察と主題解釈 —

にいくら しんすけ

新倉 慎右 (Bunkamura ザ・ミュージアム)

発表
要旨10
時
40
分
|
11
時
20
分松
ヶ
崎
・
東
キ
ャ
ン
パ
ス
内
60
周
年
記
念
館
1F
記
念
ホ
ール

アシュモリアン美術館が所蔵する紙片にミケランジェロが描いたヘラクレスとアンタイオスは、先行研究においてほぼ一貫してパラッツォ・ヴェッキオ前の《ダヴィデ》の対作品計画に結びつけられてきた。1508年に端を発するこの計画は、後にメディチ家によって引き継がれ、バンディネッリが《ヘラクレスとカクス》として完成させているが、最後の共和制下の1520年代後半には、ミケランジェロがシニョリーアから対作品制作を依頼されており、後にカンビが記述しているように、その際「ヘラクレスとアンタイオス」が主題として選ばれた可能性が高い。

本発表は、このミケランジェロによる素描の造形を分析し、さらに主題を解釈することを目的とする。素描中に描かれたヘラクレスとアンタイオスの闘争は、両者が密接に絡みあっていることが特徴になっている。エトリンガー以来の研究が明らかにしてきたように、ヘラクレスとフィレンツェとの結びつきは強く、またシモンズによれば「ヘラクレスとアンタイオス」の主題も好まれ、広く浸透していた。大地に触れている限り無敵の巨人アンタイオスを抱え上げて絞め殺すという功業に由来する主題は、すでに14世紀末には大聖堂のポルタ・デラ・マンデルラに刻まれていたため、市民にもミケランジェロにもなじみの主題であっただろう。さらにアンドレア・デル・ポツライウオーロによる有名なカンヴァス画や小ブロンズ像により、フィレンツェにおける同主題の表現は一定の完成を見ている。

しかしミケランジェロの表現は、古典古代の作例に反して両者を向い合せにしたフィレンツェ芸術の伝統を受け継ぎながらも身体を強く捻るアンタイオスを中心に、特にポツライウオーロの作品が示しているような手足を大きく広げて苦しむアンタイオスという表現とは異なっている。こうした点を踏まえ、ミケランジェロによる《ヘラクレスとアンタイオス》の、同主題のルネサンスにおける表現史の中における位置付けを考察する。またこの考察はミケランジェロの群像表現の検討にも寄与するものであり、想定される設置場所との関連における視点の取り扱いに注目して《勝利》や「サムソンとペリシテ人」と比較することで当該素描だけでなく、群像表現における彼の造形意図、造形と視点との関係を探ることができるはずである。

またミケランジェロにおけるアンタイオスは、ヘラクレスの締め付けから逃れようと身をよじっているにもかかわらず、脚をヘラクレスに絡めており、きわめて矛盾した動きになっている。さらにアンタイオスがヘラクレスから生れ出るかのような群像表現は、ともにヘラクレスを象徴として利用したフィレンツェとメディチ家のどちらをも意味しうるきわめて特異な表現なのであり、そこには両者に翻弄され続けたミケランジェロのアンビヴァレントな感情が見て取れるのである。